

私と統計学

大 屋 祐 雪

本学を去るに当って、最終講義をするようにと、学会の幹事さんから要請を受けました。講義を担当していれば、最終講義で文字通りその学期の講義の「まとめ」をして締めくくることが出来ますが、今学期は講義をしていませんので、統計学とのかかわりをお話して、その責を果たしたいと思っています。

私は、1947年4月、九州大学法文学部経済学科に入学しました。旧制ですから、学則では3年で卒業ということになっていますが、4年間在学して1951年3月に卒業しました。現代風に言えば留年です。

当時、経済学部の統計学は、後に私が恩師と仰ぐ高橋正雄先生が担当されていました。テキストは最初、有沢広己先生の『統計学要論(一)』(1946年、明善社)でしたが、卒業の頃は、森田優三先生の『統計概論』(日本評論社)を使っておられました。

有沢先生は、傾斜生産方式で戦後の経済復興を指導された東大の先生で、高橋先生のあらゆる関係の仲間であり、兄貴分でした。

森田先生は、戦後における統計制度再建時の総理府統計局長で、後に一橋大学の統計学担当教授になられた方です。

有沢先生の本で私が関心を引かれた点は、偶然と必然の論理をふまえた“大数法則”の哲学的な理由づけの部分です。この問題に立入ると、一時間は直ぐ経ちますので、わき見をせずに先へ進みます。

森田先生のテキストは、世界的に著名な G. U. Yule と M. G. Kendall

の共著 Introduction to the Theory of Statistics, rev. ed., 1937. の類書ともいうべきもので、その内容は、後年、記述統計学の呼稱をあたえられる統計解析の数理とその説明です。

その頃、理学部では北川敏男先生が確率論と統計数学を担当されていました。北川先生は、当時の統計数学の研究方向に満足しておられなかったのでしょうか。広く哲学や統計学史、さらには社会経済の計量的な分野にまで関心を寄せられ、『統計学の認識』(1948年、白揚社)という書名で自分の統計学観を世に問われました。当時の若き統計学徒にとっては、関心を強くかき立てられた本の一つです。本学の中山尊教授も学生時代、おそらくこの著書に触れられて、北川先生の門をたたかれたのではないかと思います。

この本で北川先生が主張されているところは、前にふれた Yule や Kendall,あるいは森田先生の『統計概論』にみるような統計学の考え方や統計的方法に対して、

従来の統計学は、集団現象の記述と分析の方法、すなわち“記述統計学”であるが、これからの統計学は、推測と計画のための統計学、すなわち“推測統計学”でなければならない。統計学の発達の歴史と論理はそのことを語っている。

という議論の展開部分で、論述はなかなか説得的に組立てられており、数理と思想の両面から、統計学の過去、現在、未来が論じられています。

大学で学ぶ沢山の教科目のなかで、昔も今も、「わからない!! 面白くない!! やりたくない!!」の“三ない科目”の最右翼に位置づけられているのが統計学です。皆さんにとっても、きっとそうであろうと思います。人の嫌がるそういう統計学に私が強く引かれた一つの契機は、さきにもふれた北川先生の『統計学の認識』を学生時代に手にしたことです。

統計学を志すに至ったもう一つの契機は、農業政策の教授であった田中定先生(のち佐賀大学長)の佐賀県本庄村の農家実態調査に駆り出されたことです。

田中先生は、戦前のわが国農業の発展パターンを「自小作前進」と定式化されていました。戦前は農業経済を地主、小作、自作、自小作に類別して、農地をめぐる農業経営体の多様な実態が把握されていました。田中先生は、それらの変化を零細小作の生成→零細自小作→自小作の成長→自作拡大→地主化→離脱農と捉えられ、日本農業の堅実な歩みを「自小作前進」に見出されました。先生はこの定式化を農業経営の理念や日本資本主義論から導き出すのではなく、農事統計の分析と本庄村の田畑の耕作歴をふくむ全農家の実態調査の分析から引き出されています。

その戦後版ともいふべき本庄村の調査を手伝ううちに、調査票作成の重要さと、妥当な実態調査の個票（マイクロ・データ）を適切にグループ分けすると、そこに事象を貫く発展ないしは衰退の論理が、数と量の格差や変化、あるいは傾向や規則性としてあらわれることを実感しました。残念ながらこの実態調査を先生がどう分析され、どうまとめられたか不明です。学生部長から引き続き経済学部長に就任され、つづいて一年間の海外出張、帰国されてまた学部長になられているので、山積している調査結果の分析には、おそらく着手されなかったのではなかろうかと推測されます。

北川先生の random sampling の調査論と田中先生の典型分析実態調査論とは、現象把握のための全く異なった方法ですが、この二つの調査法の論理が私の心を強く捉えました。それは私にとって学問との初めての出会いです。

1951年4月、卒業と同時に大学院特別研究生となり、高橋正雄先生のもとで統計学を専攻することになりました。高橋先生については御存知ない方が多かろうと考え、九州大学経済学部同窓会報第22号に寄せた追悼文を準備しましたので、それをお読みください。

指導教授のお願いに先生の研究室を訪ねますと、先生は、いきなり、「高橋は、統計学以外のことなら、なんでもやる男といわれています。あなたも、そのつもりで勉強してください」と申し渡されました。要するに、人に頼らず自分でやりなさい、ということです。

そして、「あなたが会いたいと思う人がいたら、いつでも紹介します。森田君など、どうですか」と水を向けられました。こうして高橋、森田両先生の紹介で日本統計学会に入会しました。

いまでは、日本統計学も紹介者2人のサインがあれば、学生でも入会が許されます。学会の運営は会費でまかなわれますので、会員数の多寡が事実上、学会財政に影響するからです。学会もいまでは大学と同じように大衆化の時代です。しかし、1960年代までは、どこの学会にも権威主義の名残があり、学会理事2人の推せんが無ければ入会できない仕組みでした。そういう空気のなかで、「好きなようにやりなさい」と言っていたことをよいことに、出来たばかりの経済統計研究会に参加しました。この研究会は「社会科学に基礎をおいた統計理論の研究」を志す者の自由な集まりです。現在では発展して経済統計学会になっています。

この研究会で蜷川四天王の大橋隆憲（京都大学）、内海庫一郎（北海道大学）、上杉正一郎（大阪市立大学）、有田正三（滋賀大学）の諸先生、さらには関西大学の高木秀玄、丸山博（大阪大学）先生方とも知り合い、関東の松川七郎（一橋大学）、安藤次郎（金沢大学）、米沢治文（東北大学）、三瀨信邦（当時、東京教育大学）の諸先生方にもこの研究会で出会うことになります。また、広田純（立教大学）、是永純弘（北海道大学）、佐藤博（当時、東北学院大学）、足利末男（京都大学）、関弥三郎（立命館大学）、野村良樹（大阪市立大学）氏など、同世代の気鋭の若手研究者と学を競うことになるわけです。

大学院の5年を終わるとき、まだ1本の論文も書いていませんでした。しかし、「社会体制と統計」という仮のタイトルをつけた大風呂敷の原稿は、ほぼ出来ていました。それをお見せすると、先生は「あなたの作文は統計学の論文になっていません。もっと小さい論文で良いから、ちゃんとしたものを書きなさい」という指導を受けました。こうして私の自称「大論文」は没になり、「昭和29年職種別等賃金実態調査について」（九州大学『経済学研究』第21巻第3号、1956年）を書きました。

1950年代の統計研究の世界には、二つの学問的潮流がありました。一つは数理統計学の流れ、そして他の一つは社会統計学です。当時議論されていた統計学の学問論（統計学の対象と方法）や教育論（どういうことを教授したらよいか、今日流に言えばシラバスの内容）から言えば、前者は資料(1)に見るように、統計学を一種の普遍的な科学方法論とみる見解であり、後者は統計学を社会科学に固有の統計方法を研究する学問であるとする見解です（資料(2)）。ドイツのフランクフルト学派やわが国の経済統計研究会なかんづく蜷川理論がそういう見解に立っています。

資料(1) 統計学を普遍的な科学方法論とする見解に R. A. Fisher のつぎの一文がある。(Statistical Methods for Research Workers. 11th ed., 1950. p. 1.)。

「統計学は、本来、応用数学の一分科であって、観測にもとづく資料を対象とする数学とみなすことができる。したがって、数学の他の分野と同じように、同一の公式が非常に多方面の問題に対して適用される。……“statistics”という言葉の語源的な意味は、統計学がもともとある国家に住む人間の集団に関する研究であったことを示唆している。しかし、そこに展開された方法は、その集団の政治的統一とは何のかかわりもないし、また人間の集団や社会的生物の集団だけに限られてもいない。……いずれにせよ、統計学は正しい意味において、個体に関する研究ではなく、個体の集合すなわち集団に関する研究である。……統計的方法は社会的研究にとって重要な方法であって、社会的研究が科学の列に伍し得るのは、主として統計的方法のためのものである。このように社会的研究が特に統計方法に依存していることから、統計学が経済学の一分科であるかのごとき不幸な誤解が生じたのであるが、しかし、経済のデータの取り扱いに適した方法があるとしても、実際は、それは生物学やその他の科学の分野において発達してきたものに外ならない」。ここで「応用数学」といわれているものが、こんにちの数理統計学ないしは統計数学であることは、いまここに改めて指摘するまでもないことであろう。

資料(2) 統計学＝社会科学方法論については、蜷川虎三の次の記述をあげておく。(統計学概論, 岩波書店, 1934. 33-4ページ)。

「統計学とは、統計方法を研究対象とする学問である。……統計方法は、

これを内容的にみれば、大量観察法(統計調査法…大屋)と統計解析法とに区別することができる。統計方法は大量の数量的研究方法であり、しかも大量が社会的集団たるかぎり、これは社会科学の一研究方法である」。

大学院で統計学を専攻するようになったとき、高橋先生は「これからの統計学は、たとえ社会統計学でも経済統計学でも、ある程度の統計数学の素養がなくてはやっていけません。わたくしも最初から勉強しますから、この本(伊藤 清『統計数学の基礎』)をいっしょに読みましょう」といわれ、先生が福岡に居られる半年は、毎週勉強会をもたれ、一問一答の練習問題にも自ら手を染められました。学問に取り組む最も大切な基本的な態度を教えられた思いです。

いま経済学部では、わが大学もそうですが、数学関係のカリキュラムを、自前で組んでいます。当時は旧制ですから、理学部の数学科の講義を聴講するか、独学でやるかしか方法がありませんでした。学期の初め何回か受講しましたが、数学専攻の学生を対象になされる講義ですから、文系出身者がついていけるはずはありません。こうして独学とは言っても、解らないところは理学部の知人に、そのつど教を請いながら、とにかく数年がかりで、当時の数理統計学の常識的なレベルまでを学ぶことになります。G. W. スネデッカーの『統計的方法』(Statistical Methods, 1946. 津村・奥野訳: 岩波書店, 1952.), W. E. Deming の『標本調査の理論』(Some Theory of Sampling, 1950. 齊藤金一郎訳: 培風館, 1953.) も、こうして読むことができました。もちろん、その後の数理統計学の発展はめざましく、私との距離はどんどん大きくなっていくばかりでした。

数理統計学の研究をめざしていない私が、非常に無理をしてこの学に接近しようとしたのには、高橋先生の忠告もさることながら、1951年の前期に連合軍総司令部(G. H. Q.)の招きで来日中のDeming博士の講演を工学部の大講堂で聴講したからです。500人収容と思われる室は、先生方や助手、大学院や学部の学生で埋め尽くされていました。『統計数学の基

礎』(前出)を勉強し始めたばかりの頃なので、講演内容を十分理解できるわけはありませんが、「日本の企業がサンプリングの理論を生産工程の管理やマーケティングに取り入れなければ、そういう会社の名はやがて電話番号帳から消えるでしょう」と言われた挑発的な発言が、いまでも強く印象に残っています。こうして、すぐれた品質管理の工場には、産業界から博士の名を冠した“Deming賞”が贈られるようになります。

大学院時代のある日、社会政策の森耕二郎先生から、「君は最近なにをやっているかね」と声をかけられました。当時、東の大河内、西の森との賛辞があった学会の重鎮で、本学の堀内教授の先生のまた先生にあたる長老教授でした。日ごろは無口ですが酒が入ると、助手や院生に議論をいどまれるので、われわれは恐れをなしていました。そのときも、お酒をめし上がっておられたので“これは危ない!!”と思いながら、「数理統計学と蜷川先生の『統計利用に於ける基本問題』を読んでいます」と答えると、先生はニコニコして、「蜷川の奴、あの本を書いた頃はレーニンの『唯物論と経験批判論』を、こっそり^(注)、独り読んでいたよ。奴さんの種本は、きっと、あれだね」と、独り言のようにつぶやかれて、「まあ、しっかりやるんだね」と言って立ち去られました。

(注) 1925年に治安維持法が公布されてからは、国体変革を意図する政治団体のみならず、そうした思想や学説に関する研究や出版も、だんだんと弾圧の対象にされていました。内容のいかんにかかわらず、レーニンの著作については特にそうでした。

森先生のこの一言は、私が蜷川統計学を理解する上で、たいへん大きなヒントになりました。以後、この『唯物論と経験批判論』は何回か読んでいます。哲学上の「ものと心、存在と認識、対象と経験」にかんする論争の書であるこの本は、現象と統計との反映＝模写の関係を根本的に考える上で、多くの示唆を含んでいるように思えたからです。蜷川先生もおそらくそう考えてこの本を読んでおられたのではないかと推察していました。

私が京都学派の諸先生方と蜷川理論をめぐる真正面から論争できるのは、森先生がつぶやかれた「奴の種本は、きっとあれだね」という一言をヒントに、『唯物論と経験批判論』を読み、蜷川先生の『基本問題』をくり返し読むという方法をとったからです。重要な文献は「くり返し読む」というのが、私の根本的な文献研究のやり方です。

ところで、また、別の意味で、学生時代に強烈なインパクトをうけ、今日まで私の研究の重要な指針ともなっているものに、経済原論を担当されていた向坂逸郎教授の次の言葉があります。講義の始めに言われた「すべてのものは疑いうる。これこそが科学の精神であり、出発点である」という言葉と、自説を主張する度ごとに強調された「社会科学の研究は、すべてから歴史的、論理的でなければならない」という教えです。

「すべてのものは疑いうる」という研究心で、当時、定説になっていた「普遍科学方法論としての統計学」と「社会科学方法論としての統計学」のそれぞれの基本的な文献について、「研究は歴史的、論理的に」という方法で、それらの理論を根底から見直す努力をこころみました。

R. A. Fisher 流の統計理論がいろいろな分野の科学的研究に用いられていることは、まぎれもない学問の世界での事実ですし、科学的研究のみならず生産工程の各種の管理にも応用されていることは、重要な社会的事実ですから、彼が、“私の”「統計学は、本来、応用数学の一分科であって……数学の他の分野と同じように、同一の公式が非常に多方面の問題に対して適用される」と主張しているのであれば、それは、まったく正しい発言です。しかし、「私の統計学は”……云々……」ではなく、「統計学は……云々……」といい、その論証のために「Statisticsという言葉の語源は……」で述べている内容（前出）に関しては、統計学の歴史と統計事業史（統計史）に照らせば、独断と偏見のそしりを免れ難い発言です。Fisher のような優れた研究者でも、専門外の領域のことに言及すれば、そういう過ちを犯す好箇な一例です。しかし、そのことと Fisher の優れた理論的貢献とは、まったく関係ありません。余計なことに言及しなけれ

ば良かったのにと、肝に銘じて私自身の戒めにしているところです。

それはともかくとして、いま仮に「数理統計学こそが統計学である」という見解に立って統計学の学問的内容をきめ、その枠のなかで、確率の数理をどんなに洗練されたかたちで構築してみても、それはこの学の定義をそうきめてその論理を展開しているだけのことであって、学問としての統計学が解決を迫られている諸課題に、なに一つ応えたことにはなりません。なぜならば社会には、社会科学的考察がどうしても必要な社会情報としての統計と統計体系、ならびにそれらにかかわるさまざまな統計実践^(注)と統計的社会関係とが、厳然たる社会的事実として在り、かつ行われているからです。

(注)「統計実践」と「統計的社会関係」という語については説明が必要でしょう。というのは研究を進める必要上、私が自分流に用い始めた用語だからです。統計とかかわる人間のさまざまな社会的行為を、いまかりに統計実践とよぶならば、この語は、目的実現のために統計と統計方法を駆使して遂行する業務を、統計サイドからとらえた総称とすることができる。統計活動、統計業務という語もあるが、この二語はこれまで一般的には統計機関（主として官庁）の統計作業に関して（狭義に）使われているので、その点の考慮からさしあたっては（広義に）統計実践という語を用いる。社会では、統計業務としての統計実践（政府の統計活動）よりも、あれやこれやの日常業務（たとえば予測、計画、管理、評価など）に、統計と統計方法を駆使する、ここでいう意味での統計実践の方がはるかに多く行われているからである。

「統計的社会関係」という語を、私は、統計実践の担い手である統計主体、統計調査員、被調査者、および統計利用者が係る統計法規、統計機構、統計予算、統計教育、および統計環境（調査環境、利用環境）等を含む社会的諸関係の総称として用いている。

社会科学は、文字通り社会あるいは社会現象にかんする科学ですから、社会的な存在ないしはそれとの関係が希薄か、あるいは直接的でない“ことがら（事象）”は、当然のことながら、社会科学の直接的な関心事にはなりません。言い換えれば、ある“ことがら”が研究者個人にとって科学

的にどんなに興味深い関心事であっても、それらが「社会的なことから」にならないかぎり、そのような個人的な関心事は、社会科学がぜひ問題にしなければならない研究対象ではありません。そのことを裏から言えば、社会的に重要な役割を演じている制度や行為が、ある種の問題状況を呈しているのに、社会科学がなんらの学問的関心を示さないならば、科学的見識の欠如と評されても抗弁の余地がないでしょう。社会科学のそのような理論的性格は、社会科学としての統計学についても、また同じであると考えざるをえません。

統計数理の研究開発を志向し、そこに理論的関心を寄せることは、研究の自由に属することであり、科学にとっても社会的実践にとっても、それは必要不可欠なことです。しかし、開発された数理が社会科学とどうかかわり、社会的実践にどう役立てられるかを把握し検討することは、数理統計学の第一義的な研究課題ではありません。

他方、社会科学としての統計学にとっては、そうした問題状況は避けて通れない研究課題です。なぜならば、統計的社会関係に組み込まれ、統計実践の不可分の要素になっている数理は、もはや抽象的な数理ではなく、社会事象化した数理だからです。したがって、そうした数理については、適用の論理と手続の妥当性の検討とともに、適用の社会的意義の考察が不可欠になります。

「すべてのものは疑いうる」という目で、社会科学方法論説をみましましょう。資料(2)にみるように、「統計学とは、統計方法を研究対象とする学問である。統計方法は、これを内容的にみれば、統計調査法と統計解析法とに区別することができる。統計方法は大量の数量的研究方法であり、しかも、大量が社会的集団たるかぎり、これは社会科学の一研究方法である」というのです。

周知のように、統計は統計作成という社会的行為の結果であり、統計解析はそれらの統計を情報として行うそれまた一種独特の社会的行為です。ところで、上の二つの統計実践は社会科学の研究として行われているので

しょうか。確かに大学内ではそのようなものとして行われています。しかし、社会では果たしてそうでしょうか。そこでは社会科学の研究とは異なる統計実践が予測、計画、管理、評価、点検等の業務として多様な姿で行われています。

統計史や統計学史を論理的、歴史的に追究して、こんにちの統計学を見直すばかりでなく、現行の統計実践と統計的社会関係を把握し分析して、理論的総括を行わねばならないと、再び考えるようになりました。大学院時代、「人に頼らず好きなようにやりなさい」という先生の言葉をそのまま行動に移し、大風呂敷を拡げて没になった自称大論文「社会体制と統計」という最初の問題に回帰したわけです。もちろん大学院を終わって数十年後のことですが、それまで頭のなかでモヤモヤしながらも、常に私から離れなかった「統計学＝統計方法の学」という定説の呪縛を、上記のように考えることによって、やっと断ち切ることができたように思います。そのころ学会等で私が強調していた点は次のことです。

- (1) 統計なかでも政府統計の作成は、こんにちでは特別な社会的行為として、一定の独自性と恒常性をもつまでになっており、いわゆる統計的研究からも相対的に分離した社会的位置と性格と役割をもつようになっていく。
- (2) 統計を用いる経済分析や経済計画も、研究者の科学的関心事を越えて、いまや官庁と官庁エコノミストの機能となり、行財政の一環に制度化されるまでになっている。
- (3) 政府は名実ともに最大の統計作成者であり、最大の統計利用者でもある。したがって、国民が利用する統計のほとんどは政府が作成した統計である。
- (4) 政府は国家目的のために統計を作成し、利用するのであるから、統計学が政治経済の現段階における国家と統計実践との関係に関心を寄せないならば、それこそ学問としての要の軽重を問われよう。
- (5) こんにちの統計利用は、利用者の社会的、あるいは経済的な立場、

その人の世界観や経済理論に裏打ちされた、①各種の管理業務への直接的な利用、②数理を伴った予測、計画、管理、評価への利用、③社会経済の動向判断ないしは実証的研究のための利用、④論争や世論形成の手段としての利用である。そういう統計実践にも時代的な特徴があるであろうし、それらの特徴は科学的にそれぞれ把握されねばならない。

(6) 上述のことが社会的な事実であるならば、統計学者は、それらを特殊な社会現象あるいは社会的な過程として考察の対象にせざるをえないだろう。すなわち現行の統計、統計作成、統計利用をこんにちの統計的社会関係と不可分のものとして把握し、それらの統計実践の歴史的社会的性格とその理論的、技術的構造を明らかにすることは、社会科学としての統計学を抜きにしては考えられないだろう。

(7) 統計学=統計方法論派は、これらの課題をどのように追究し、学問的にどう位置づけたであろうか。私が学びえたかぎりでは、理論化も体系化もまだなされていないように思われる。あるいは次のように言った方がより適切なのかもしれない。統計学=統計方法論派にとっては、それらは統計学の基本的な課題でもなければ、重要な研究対象として直接問題にしなければならない性質のものでもない。せいぜい補論ないしは付随的な研究対象としてしか扱われていないのが現状である。

1966年に発表した「わが国の統計事情(-)」の「あとがき」で、私は「こんにちの社会統計学は事態の進展にいちじるしく立ち遅れている科学の一つである。しかも多くの人びとは半世紀この方その体系と概念を墨守し、統計学と統計事情の歴史的被規定性の側面をみようとしな。いな、みようとしても、みることができないのが、これまでの伝統的な見解、統計学=社会科学方法論説の立場である。私は統計学にかんして社会科学方法論説の立場をとっていない。したがって、本稿も全く別の立場から考察をすすめている。次稿でもそうするつもりである」。

蜷川理論を学び始めてから、すでに15年が過ぎていました。その間、多くの人が舗装された右の道を自動車や自転車で往き来しているとき、九州の田舎者が訳もわからずに、左の樹海を抜けて行けば、その向こうに素晴らしい景色がきっとあるにちがいないと思い込んで、一人で樹海にとび込んだのと同じような企てですから、道に迷い出口がわからなくなるのは当然のことです。いま想うと、最初に書いて没になった自称「大論文」は、いうならばそういう研究過程の作文だったわけです。

そういう苦悩の時代に、心の支えになったのは、寺田寅彦の「科学者とあたま」という随想でした。力づけられる文章がいくつもあります、今日はそのうちの一つだけ紹介します。

「頭のいい学者は、また、何か思い付いた仕事があった場合にでも、その仕事の結果の価値という点から見ると、折角骨を折っても結局大した重要なものになりそうもない、という見込をつけて着手しないで終る場合が多い。しかし頭の悪い学者はそんな見込が立たないために、人からは極めてつまらないと思われる仕事でも何でも、我武者羅に仕事に取付いて脇目もふらずに進行して行く。そうして居るうちに、初めには予期しなかったような重大な結果に打つかる機会も決して少なくはない。この場合にも頭のいい人は人間の頭の力を買被って天然の無際限の奥行きを忘却するのである。科学的研究の価値は、それが現われるまでは大抵誰にもわからない。また、結果が出た時には誰も認めなかった価値が十年百年の後に初めて認められることも珍しくはない」。

「社会科学の研究は方法論に始まって方法論に終る」という教訓に従うならば、私に関心を寄せている「社会体制と統計」あるいは「国家と統計」というような課題の追究には、どういう研究様式をとらねばならないかが、あらためて問題になります。次の文章に出会ったとき、「これだ!! これで行こう。できるかどうか解らないが、とにかくやってみよう」と思いました。

「マルクスは（大の字ではじまる）『論理学』こそ残さなかったが、『資本論』の論理学を残した。これは与えられた問題について十分に利用さるべきである。……一つの社会関係としての商品の分析。二重の分析。演繹的分析と帰納的分析—論理的分析和歴史的分析。……。」

これは『哲学ノート』のなかの「ヘーゲルの弁証法（論理学）のプラン」と題する章にあるレーニンの覚え書です。レーニンのような人さえ、マルクスの『資本論』は社会関係の「二重の分析」にあたり、「十分利用さるべき」論理学と言っているのだから、『資本論』で用いられている「演繹的分析と帰納的分析—論理的分析和歴史的分析」の方法を見習わない法はないと考えました。

戦後まもないころ九大の経済学部では、『資本論』は必読文献の一つに挙げられていました。それで資本論研究会に参加して、学生時代、大学院時代を通してよく読みました。三戸公（立教大学名誉教授）、小野朝男（元和歌山大学長）、北吉賀勝幸（熊本学園、元学長、現理事長）、中谷哲郎（前北九州大学長）、川端久夫（九州大学名誉教授）氏、それに向坂先生の資本論院ゼミの稲生晴（元松山大学長）、本吉敬治（福岡大学名誉教授）、松井安信（北海道大学名誉教授）、小嶋恒久（九州大学名誉教授）、寺園徳一郎（福岡大学名誉教授）、馬場元二（元札幌大学長）氏などが、そのころ共に学んだ学界関係の懐かしい顔ぶれです。

統計学の研究に関して、先に述べたような問題意識を私がつようになったとき、頭にひらめいたのは『資本論』の次の二文です。

資料(3)「起りうる誤解をさけるために一言しておく。私は、資本家や土地所有者の姿を決してバラ色の光で描いていない。しかしながら、ここでは、個人は、経済的範疇の人格化であり、一定の階級と利害関係の担い手であるかぎりにおいてのみ、問題となるのである。私の立場は、経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとするものであって、決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするのではない。個人は主観的にはどん

なに諸関係を超越していると考えていても、社会的にはやはり諸関係の所産にほかならないものであるからである」(資本論 第1巻第1版への序文)。

資料(4)「パリの『実証主義評論』は私にたいして、次のように非難する。すなわち私は、一方で経済学を形而上学的に取り扱っており、他方では——こともあろうに、——私が、与えられたものをただ批判的に解剖することで満足していて、未来の飲食店のための調理法は書いていないと、言って非難する」(第2版の後書)。

資本論の研究者がこの二つの文章をどう評価しているのか、私は全く知りません。しかし、私にはマルクスの社会研究に対する基本的な立場が表明されているように思えてなりませんでした。

この文章には経済学、広くいえば社会研究に対する二つの立場が顔を出しています。その一つは、文中でマルクスが自ら「私の立場は」と書いている「経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとする」立場です。私は後にこの立場を「客観＝批判の視座」と呼んでいます。

そして他の一つは、同じ文中の「個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとする」立場です。私は後にこの立場を「主体＝実践の視座」と呼ぶことにしました。

ところで、『実証主義評論』がマルクスを指して、「与えられたものをただ批判的に解剖することで満足している」と非難しているのは、マルクスが「経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとする」立場、換言すれば客観＝批判の視座で経済過程を分析していることに対する非難と理解されます。

そして、「未来の飲食店のための調理法を書いていない」という『資本論』に対する非難は、「個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとする」立場の経済学を、『実証主義評論』誌が期待していることの現れのように思われます。私の用語法で言えば『主体＝実践の視座』からの『客観＝批判の視座』で分析された『資本論』に対する論難と言うことになります。

主体・実践の視座とは、対象への働きかけ、あるいはその方法や手段を、自分が持たねばならない理論ないしは技術と意識して、その改善、発達、あるいはそれらに役立つ新しい理論や技術の開発を志向する主体的なものの見方、考え方にはかなりません。統計理論家や統計家は、自ら意識して客観の視座に立たないかぎり、たいていは主体・実践の視座で技術を論じ、統計方法の論理を構築して、その理論的發展に努めています。したがってその研究成果である統計理論は機能的、操作的かつ主体的な論理性をおのずと内包します。

それに対して客観の視座は、社会で行われている統計実践を、ある主体が、ある目的のために、ある種の統計的方法を用いて、統計的社会関係のなかで行う一種の社会的行為とみて、そのような統計実践と統計的社会関係をほかの社会現象と同じ位相の社会的過程として考察します。

図1から図6までは、私が客観の視座から統計学を構想したときの思考過程を、みなさんの視覚に訴えて理解してもらうために描いたものです。

図1

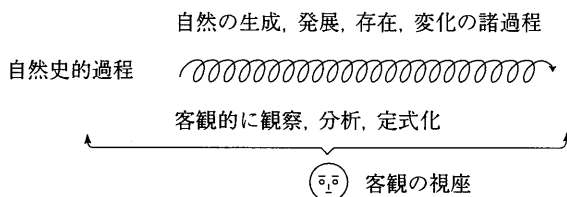


図2

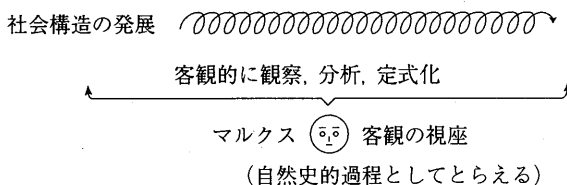


図3 経済学の視座

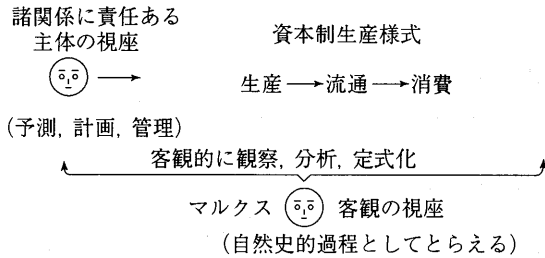


図4 「資本論」における反映=模写の様式

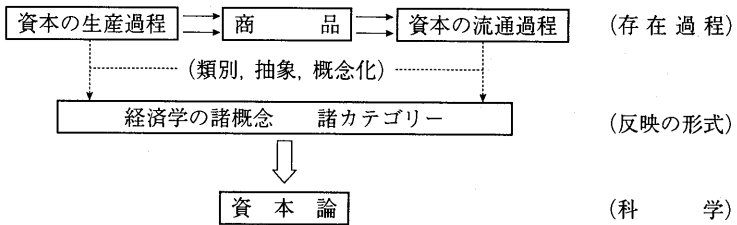


図5 統計学への反映=模写論の適用

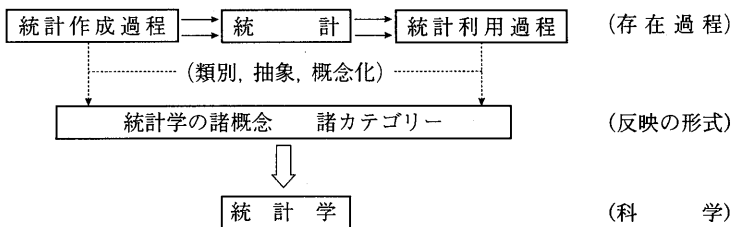


図6 統計学と視座

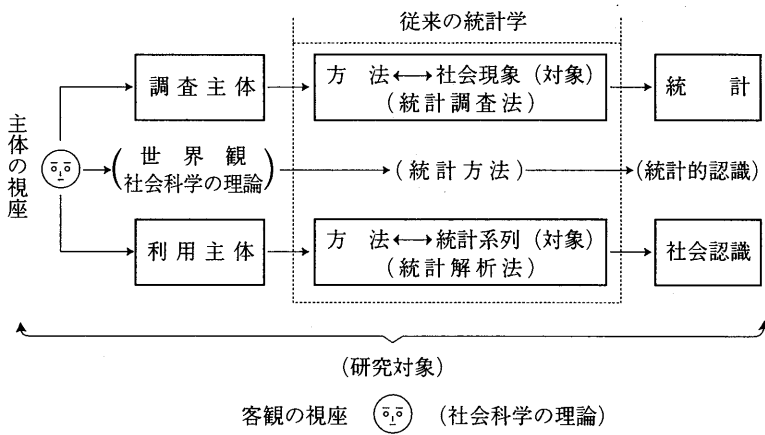


図1から図6に至る私の統計学の考究，形成過程については，なお多くの説明が必要ですが，それには十分な時間と『資本論』や従来の統計学についての基礎的な知見が前提になりますので，ここでは，図6の上段，(主体の視座) → (調査主体) → (方法 ↔ 社会現象) → (統計) = 統計作成過程の全容を研究対象として，客観の視座（下段の顔）から考察し，類別，抽象，概念化の思考を重ねて、『統計情報論』（九州大学出版会，1995）ができたことと，1997年の経済統計学会総会報告「日本における社会統計学の課題」のなかで，次のように述べていることを追記して，私の統計学についてのおおよその理解を願いたいと思います。

わが国の現行統計制度は1947年に公布された統計法と，そのとき再建された統計組織によって，その原型ができたものです。その後50年，わが国の政治，経済，社会，思想，文化等の変貌には著しいものがあります。しかし，統計制度に関しては，ときの政府の行政改革や財政整理の対象とされ，あるいは省庁と権限をめぐる対立の妥協の結果として，統計法の一部改正や統計行政，統計機構に部分的改変はありますが，統計作成システム，なかんづくそれを支えている統計法や統計制度が時代の進展

と社会の変容に対応して、根本的に見直されるということは1949年以来ありませんでした。それだけに、現行統計制度をめぐる統計社会の諸矛盾は著しく激化しています。

統計社会の諸矛盾が激化すると、その様相は統計的問題状況として、統計関係者の目に映ります。そこで「統計行政の新中・長期構想」を考察の素材に社会統計学の課題を考えてみたいとおもいます。

『統計行政の新中・長期構想』（以下では「新答申」と呼びます）は、総務庁長官の諮問に対する統計審議会の答申で、その内容については同文の書名で全国統計協会連合会から1995年に公開されていますので、会員の多くは、すでにお読みのことと思います。

答申に至る議論の過程で、作成主体や利用主体の直接的経験にもとづいて、あるいは間接的経験にもとづいてさまざまな知見が述べられ、また、意識せざる客観の視座からも理論的な発言がなされたことは、想像に難くありません。事務担当のまとめによれば、章ごとの分科会で正味30時間から50時間に及ぶ討議がなされたといえます。そしてそうしたことの原因について「煎じ詰めれば、課題へのアプローチの仕方が余りにも多様であったことである」^(注)と記されています。

(注) 鎌田英幸「統計調査の将来像を求めて」『統計』、1995年6月号（統計調査の中・長期構想、特集号）14ページ。

統計実践と統計的社会関係をめぐる議論で、視座の意識がなければ、課題へのアプローチが区々となり、議論が収斂しないのは、むしろ理の当然です。

第6図にかえります。

この図で言えば、人の顔が答申の視座すなわち統計政策主体の目と頭です。この視座を意識することによって、議論は収束に向かいます。なぜならば、次に具体的な施策ないしは取組みが予定されるからです。

他方、客観の視座は、現在の統計的問題状況を、図の上段と下段の統計実践とそれに係わる社会過程の変容として捉えます。すなわち一方における統計作成と統計的社会関係の矛盾の増大、他方における統計利用と国民共有の情報資源としての統計のあり方、換言すれば、統計利用と統計情報の公開をめぐる矛盾の顕在化と認識し、その方向とあらわれ方を分析します。

ここで「矛盾の増大」といい、あるいは「矛盾の顕在化」と述べたのは、統計作成と統計的社会関係との間にも、統計利用と統計情報の公開との間にも根本的矛盾があり、それらの矛盾が社会の進展につれて、あるいは増大し、あるいは顕在化する、というように事態を認識するのが客観の視座だからです。したがって、私にとって批判とは事態についての悪口ではなく、矛盾を認識し分析して、状況を客観的に明らかにすることにほかなりません。それが真に科学的な批判であると考えています。その意味からして客観の視座は「批判の視座」でもあります。だから、統計政策の立案にさいしては、客観の視座での問題状況の認識をふまえて、主体の視座に「座直り」し、今度は行財政の現行制度のもとで、改変可能な許容範囲の統計行政の見直しと実行可能な政策課題の提示を行うことになります。

統計実践と統計的社会関係に顕在化しつつある現在のわが国の問題状況（矛盾のあらわれ）を具体的に認識、理解し、その解決の方策を考究することを旨として、平成8年（1996）から松田芳郎（一橋大学教授）氏を研究代表者として、重点領域研究「統計情報活用のフロンティアの拡大」が発足しました。その三大研究プロジェクトの一つを、かつて私の院生だった浜砂敬郎（九州大学）、森博美（法政大学）、坂田幸繁（中央大学）、西村善博（大分大学）の教授連が背負っていることは、私にとっては、なによりも大きな喜びです。

1995年に公刊した『統計情報論』を持参して、先生を病床に見舞ったとき、「ああ、できましたか」と言われただけで、あれほど議論好きだった往年の先生の面差しは、もはやどこにも感じられませんでした。あまり

にも遅すぎた公刊が悔まれます。先生の訃報に接したのはそれから数ヶ月後のことです。告別の弔辞で、

「私をはじめ論文を書いたとき、先生は私の論文を読まれて『学者と世間でいわれている人が真摯に取り組んで書いた論文には、どこかに真理を語っている側面があるはずです。彼が本当にあなたが貶しているような論者であったり、頭脳の持主であったら、とても大学教授は務まりません』と、私の挑戦的な行論と文体を諫められました。また、あるときこうも言われました。『やさしい内容をむずかしく書く人は、そのやさしいことさえ、本当は解っていないためです。これからは、たとえむずかしい内容でも、努めて易しく書くよう心掛けてください』そう言われて、私の論文の至るところに朱筆を入れてくださいました。

大学院を終わり、赴任した大学で独り論文を書くとき、朱筆の入った旧稿を座右に置いて、文章を書くときの諫めにしていたことを思い出します。

先生は東北仙台の人、私は九州柳川の生れ。学生時代に先生の門をたたいていなかったら、今日の私はおそらくなかっただろうと、来し方を振り返ると、いまさらながら、出会いの大切さと先生の御高恩を思わざるを得ません。」

と述べているのは、統計学という学問を介しての先生との思い出のかずかずが脳裏に焼き付いているからです。良き師との出会いでした。

本学の学長として赴任した1992年4月の入学式で、私は次のように述べています。その後も述べ方に違いはありますが、式辞のなかで必ず次のことに言及しています。

「大学がその人の人生にとって、どういう価値をもつかは、その人が過ごしたキャンパスでの『三つの出会い』にあります。三つの出会いとは、師、友、本との出会いです。それらはいずれも向こうからやってくるもの

ではありません。講義やゼミナール、部活動やクラブ活動、研究会などを通して、あるいはキャンパスでの立ち話から偶然生れ、深められ、大きく育っていくものです」。

「出会い」の大切さについては、1996年の『赤馬』第18号に書いていますので、ぜひ読んでください。W. S. クラークは札幌農学校を去るとき、Boys be ambitious! という言葉を残して馬上の人となったと伝えられています。私にはそういう名句は残念ながら浮かびません。ただ、出会いの大切さについては、この講義でよく理解していただけたと思いますので、あらためて「良き出会いを大切に」というごく平凡な言葉を皆さんにお贈りして、今日の最終講義の結びにしたいと思います。ご静聴有難うございました。

<あとがき> 本稿は去る1月21日に行われた下関市立大学学会主催の最終講義のために準備した草稿です。時間の都合で多くを割愛しましたので、お願いして本誌に全文を載せていただくことにしました。